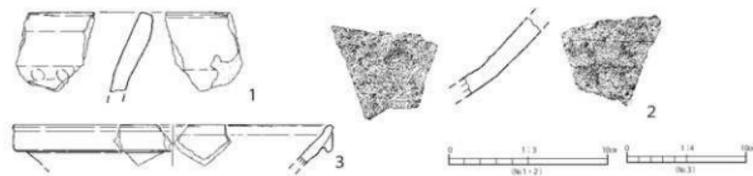


- P48 ①灰黄褐色(10YR4/2)②シルト③SL④弱⑤弱⑥紫⑦ローム粒(φ0.05~0.1)含む、ロームブロック(φ0.5~1.0)散在、炭化物(φ0.1~1.0)散在、黄色粒子(φ0.1~0.2)散在、黒色土ブロック(φ2.0~8.0)含む。
- P49 ①黒褐色(10YR3/1)②シルト③SL④弱⑤弱⑥軟⑦ローム粒(φ0.05~0.4)含む、ロームブロック(φ0.5~1.5)散在、黄色粒子(φ0.1~0.2)散在、黒色土ブロック(φ0.5~2.0)散在。
- P50 ①灰黄褐色(10YR4/2)②シルト③SL④弱⑤弱⑥しょうろーム粒(φ0.05~0.1)含む、黄色粒子(φ0.1~0.3)散在、黒色土ブロック(φ0.5~4.0)含む。
- P51 ①灰黄褐色(10YR4/2)②シルト③SL④弱⑤弱⑥紫⑦ローム粒(φ0.05~0.4)含む、ロームブロック(φ0.5~2.5)含む、炭化物(φ0.1~0.5)散在、黄色粒子(φ0.1~0.3)散在。
- P52 ①黒褐色(10YR3/2)②シルト③SL④弱⑤弱⑥軟⑦ローム粒(φ0.05~0.1)含む、ロームブロック(φ0.5~2.0)含む、黄色粒子(φ0.1~0.4)散在、黒色土ブロック(φ0.5~11.0)含む。



第11図 段切り状遺構出土遺物図

第7表 段切り状遺構出土遺物観察表

記載番号	種別	器種	残存部位	器高 長さ	口径 幅	底径 厚さ	重量	外面色調	内面色調	主な文様・調整等	備考	
1	軟質陶器	内耳鍋	口 破片	(5.0)	—	—	2.5Y 6/1	黄灰	2.5Y 6/1	黄灰	外:ヨコナデ, 内:ヨコナデ。	白色粒、黒色粒。
2	常滑	鉢	体 破片	(5.0)	—	—	5YR 3/2	暗赤褐	5YR 2/1	黒黒	内:ヨコナデ。	白色粒、白色塵。
3	瀬戸	挿鉢	口 破片	(3.5)	<26.3>	—	10YR 4/1	褐灰	10YR 4/1	褐灰	外:褐色色麻輪, 内:褐色色麻輪。	黒色粒。

縁を持つ。口縁部は比較的短く、口縁端部内側が外側端部より高い。体部下部は丸みを帯び、底部は丸底であると推定される。内耳は欠損しているが、内面には内耳の挿し込み跡が確認できる。これらの特徴から、時期は14世紀後半~15世紀初頭の内耳鍋出現期の最も古い一群(秋本2005)であると考えられる。SK 02 No. 9・11も同様の時期と推定できる。

SK 02 No.10は、縁が明瞭でなく、口縁が緩やかに外反する。口唇部はやや丸みを帯びる。時期は15世紀前半と考えられる。SK 02 No.10・11・13は接合はしなかったものの、調整・器形などから同一個体の可能性も考えられる。段切り状遺構 No.1とSK 02 No.13は口縁部破片しか残存せず、鉢との区別が難しいが、傾きから内耳鍋と判断した。

鉢はSK 02 No.12・14~16の4点が出土した。14~16は底部には回転糸切り痕が見られる。12は、口唇部が内側・外側ともに丸く突出し、口縁部はわずかに外反する。時期は15世紀初頭~前半と推定できる。14~16も同様の時期と考えられる。14は、卸目を持たないが内面は著しく摩耗しており、使用痕と考えられる。横方向にヘラ削りを施す。15・16は、遺存度が悪く、底部のみ残存する。15も内面は摩滅している。今回出土した個体の中には、卸目を持つものは認められなかった。

土師器 SK 02 No.1は、くずれたコの字形口縁を持ち、体部上部に横方向ヘラ削りが、一部縦方向ヘラ削りが認められる。器厚は薄い。頸部にはやや厚みがある。以上から、「コの字」のくずれ始める10世紀前半の年代が考えられる。

土師質土器 SK 02 No.7は、底部のみが残存するが、高い台部を持つ。**須恵器** S I 01 No.1は、口唇部が外反し、断面が台形の台高を持つ。10世紀前半と推定できる。**かわらけ** SK 02 No.18の環は、体部破片のみが残存する。外面にヨコナデ成形を施す。時期は15世紀初頭~後半と推定される。

羽釜 SK 02 No.2は、吉井型羽釜で、口縁部がほぼ直立に立ち上がり、わずかに内傾する。内外面ともにヨコナデを施す。断面三角形の鬚を持ち、口唇部は水平に削られる。以上の特徴から、年代は10世紀後半頃と推定できる。

茶白 SK 02 No.19の茶白は、下白の上縁部破片で、材質は多孔質安山岩である。遺存度が悪く、形式からの分類は困難である。時期は、茶白が全国的に城館や集落で出土するようになる15世紀後半~17世紀前半と推定される。

灰釉陶器 SK 02 No.5は、長頸壺と思われる頸部の破片のみが残存する。外面は灰白色釉、内面は緑色釉を施す。**常滑焼** 段切り状遺構 No.2は破片のみで、器種は糞と考えられ、底部付近の体部と見られる。内面にヨコナデを施す。**瀬戸焼** 段切り状遺構 No.3は、挿鉢の口縁部破片である。大窯3期後半と見られ、時代は16世紀半ば~後半と考えられる。内外に褐灰色釉を施す。

VI. まとめ

今回の調査で検出された遺構は、10世紀前半の竪穴建物1棟、中世の地下式坑1基、段切り状遺構1基、段切り状遺構下面で検出された土坑9基（うち1基は調査時は竪穴建物として調査した）、ビット52基である。

竪穴建物（S101）は、調査区の北西隅で検出され、カマドを含む南東隅をSK02に破壊され、上部も削平されており、残存状況は良いとはいえない状況であった。遺物も建物内から出土したものは少なく、SK02内の本建物付近から出土した遺物から本建物の時期を判断せざるを得なかった。本調査地点の北西180mに位置する第1次調査地点では、本建物と同期の10世紀代の集落が検出されており、本建物もこの集落の一部と考えられる。

地下式坑（SK02）は、段切り状遺構の縁に位置する。北側の壁面が内傾していることから、もともと天井が存在していたと考えられ、坑底には落下した天井部と推定される土（7・8層）が堆積する。残存する深さは確認面より1m～1m10cmであるが、北壁の傾斜から推定すると、坑底から天井までの高さは1m20cm～1m30cm程度と考えられる。東壁から段切り状遺構の底面側にスロープ状の落ち込みが認められ、出入口と判断した。段切り状遺構から出入りする横穴式（半地下式）の構造であったと考えられる。遺物は主に軟質陶器の内耳鍋や鉢であり、15世紀代を主体とする。

段切り状遺構は、調査段階では人為的につくられた段差（地形変化）との認識はあったものの、遺構としての認識はなかった。整理調査において、地下式坑と伴出する台地の縁辺部などにつくられる大規模な地形改変遺構として「段切り状遺構」の存在を知り、段切り状遺構と判断した。千葉県では「台地整形区画」と呼ばれることもある。段切り状遺構では段切りされた底面にビット群や長方形土坑などの土坑群が検出され掘立柱建物群などを形成することが多く、本遺跡でもビット群や長方形土坑（S102）などの土坑群が検出されているが、ビット群は掘立柱建物を構成する配置は認められなかった。段切りの段差は南北に伸びており、調査区外の南北と東側に段切り状遺構が広がると推定される。また、段切りされていない上段部に屋敷跡が検出されることがあり、本遺跡でも段切り状遺構の上段部が広がる西方向に中世の屋敷跡が想定されよう。ビット群や土坑群遺物は、軟質陶器の鉢や瀬戸焼の播鉢、常滑焼の裏の破片が、段切り状遺構を埋没するB混土層から出土しており、瀬戸焼の播鉢が16世紀代の所産であり、最終的な埋没は負輪城の築城頃まで下る可能性もある。

地下式坑も段切り状遺構も、覆土の上半はAs-Bを多含するB混土である。段切り状遺構の覆土の下部は、As-Bを混入しない土で埋没している。遺構の底面で検出されたビット・土坑群（SK04を除く）は、S102やSK09、P2のセクションで確認されたように、段切り状遺構の下部の覆土層の堆積前に埋没している。調査区内からAs-Bの純堆積層は検出されていない。層位的には、As-Bの降下以前に掘削され、一部埋め戻されている可能性は排除できない。出土遺物と組立はあるが、埋没に時間差がある可能性も考えられる。

参考文献

- 中村會司 1979 「内耳土器の編年とその問題」『土曜考古 創刊号』土曜考古学研究会
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981 『清里・陣馬遺跡』昭和53年度県営畑地帯総合土地改良事業清里地区埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 伊藤智樹 1986 「土壌群を伴う竪穴状区画について—台地整形区画に関連して—」『研究連絡誌17』(財)千葉県文化財センター
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987 『上野国分寺・尼寺中間地域』関越自動車道（新高崎）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
- 高崎市史編さん委員会 1996 『新編 高崎市史 資料編3 中世1』高崎市
- 清水 豊・星野守弘・木津博明 2000 『跡について考える』かみつけの里博物館
- 谷藤保彦・山下誠信・水谷貴之 2003 「群馬県内出土の茶臼について」『研究紀要21』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 秋本太郎 2005 「上野と周辺地域との関係—在土器の分布論から探る—」『第1回内陸遺跡研究会シンポジウム資料集 海なき国々のモノとヒトの動き』内陸遺跡研究会
- 日本土壌肥科学会 2006 『土壌の観察・実験のテキスト』日本土壌肥科学会
- 水谷貴之 2007 「茶臼の挽き目と分画」『上毛野の考古学—群馬県出土資料から—』群馬考古学ネットワーク
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『細谷B遺跡』一般県道林岩下線道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 東国中世考古学研究会 2009 『中世の地下室』高志書院
- 寺里和久 2012 「遺跡発表2 佐倉市 白井屋敷跡遺跡・吉見城跡—中世屋敷の空間利用—」『第16回遺跡発表会』公益財団法人印旛都市文化財センター



1 調査区全景 北から



2 調査区俯瞰 北西から



3 地下式坑 (SK 02)、段切り状遺構全景 北から



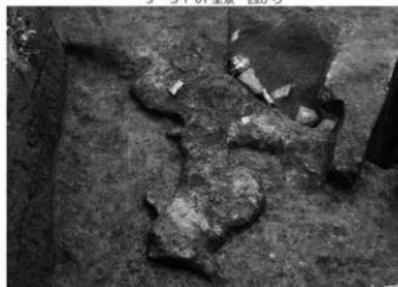
4 遺構検出状況 東から



5 S101全景 西から



6 S101カマド全景 西から



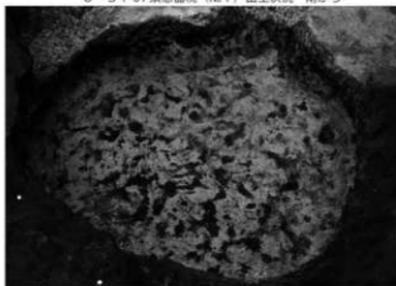
7 S101カマド検出状況 西から



8 S1 01 須臾器(No1) 出土状況 南から



9 SK 02 流入遺物出土状況 南東から



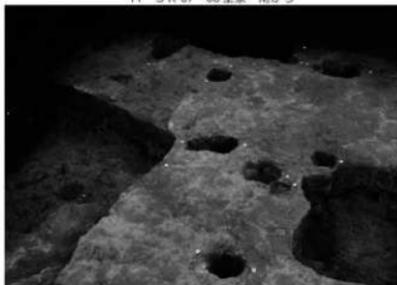
10 SK 02 完壺全景 西から



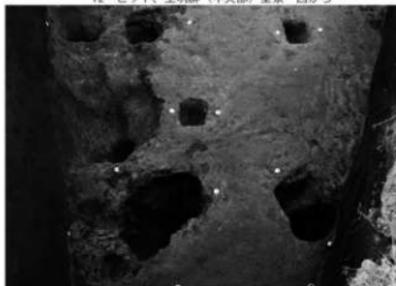
11 SK 07・08 全景 南から



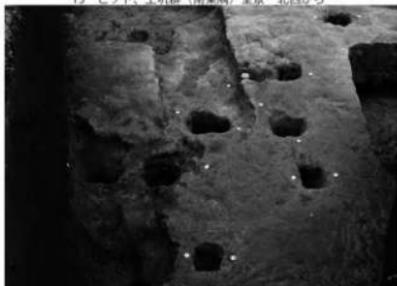
12 ビット、土坑群(中央部) 全景 西から



13 ビット、土坑群(南東部) 全景 北西から



14 ビット、土坑群(北東隅) 全景 北から

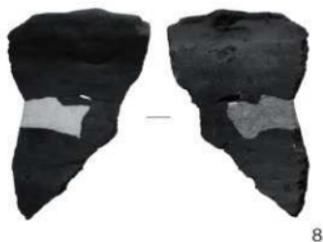


15 ビット、土坑群(東部) 全景 北から

S I 01



S K 02



段切り状遺構



発掘調査報告書抄録

ふりがな	ぜんとくもりいせき3
書名	全徳森遺跡3
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第700集
編著者名	村上章義・笹井 彩・高崎市教育委員会文化財保護課
編集機関	高崎市教育委員会・株式会社歴史の杜
所在地	〒370-8501 群馬県高崎市高松町35番地1 〒377-0425 群馬県吾妻郡中之条町西中之条723-9
発行年月日	平成30年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ぜんとくもり 全徳森3	たかさし 高崎市 みさとまち 箕郷町 おいら 生原 あざぜんとくもり 字全徳森 ばん ばん 474番 10.476番 1.477番2	102024	709	36° 23' 38.1"	138° 57' 58.6"	2017.08.22 ～ 2017.08.31	78㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
全徳森遺跡 (第3次調査)	集落	古代	竪穴建物1	須恵器環、羽釜、土師器口の字襖、土釜、平瓦、灰釉陶器壺、土師質土器高足高台埴	
	その他	中世	土坑10、ビット52、段切り状遺構1	軟質陶器内耳銅、鉢、かわらけ、茶白(下白)	段切り状遺構と地下式坑

要約	箕郷地域で初めての中世の段切り状遺構と地下式坑の調査。時代的にも箕輪城の前段階にあたり、箕輪城築城へ至る箕郷地域の動向を知る上で重要な遺跡。
----	--



抄録図 遺跡の位置(国土地理院1/25,000地形図「下室田」)

高崎市文化財調査報告書 第700集

全徳森遺跡3

—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成30年1月24日印刷

平成30年1月31日発行

編集 株式会社 歴史の社
発行 高崎市教育委員会
株式会社 歴史の社
有限会社 芙蓉興産
印刷 上海印刷工業株式会社